

中国古代の石刻文の分類について

宮 崎 洋 一

一、はじめに

標題にある「石刻文」は、永く後世に伝えるために石に刻した文の総称である。単なる甲骨や青銅器などの「もの説明」だった甲骨文や金文に比べ、石刻文は石自体と関係ない文を刻むことによつて、文字が記載言語として独立した点で大きく異なっている。しかし、その制作に非常に手間がかかる上に持ち運びが不便なためと、石が建築や彫刻の素材としても用いられるために、石刻文の内容は、竹帛や後に出現する紙のように全く自由なものとはならなかった。

史料の大半が、後の人の編集によつて伝えられることのも多かった前近代の中国では、古人の営みを直接ふれることの出来る「生の史料」は、非常に貴重なものと考えられていた。宋代にはじまり、清代に大きく発展した金石学は、

まさにこの「生の史料」を対象とする学問であり、その中で石刻文は金文と共に、最も重要な位置を占めている。

しかし、石刻自体の種類が多いだけでなく、そこに刻された文の内容が多岐にわたる上に、同類の文章が石刻以外のものに記されることも十分にあり、さらに石刻文が古くから拓本を採ることによつて文章だけが読まれることが多かったために、石刻文の分類や呼称は基準が一定していない。本稿は、体系的に石刻文について解説した先人の業績を概観した上で、改めてその分類を再整理しようとするものである。

二、これまでの分類

今回参照したのは、いずれも石刻文について比較的体系的、系統的に論じている以下の諸書である。その目次・章立てなどを、特に次節の再整理に関わる部分については詳

しく、抄出するならば以下のようなになる。

A、葉昌熾『語石』十卷。宣統元（一九〇九）年刊。

歴代の石刻について、時代・地方・体裁・文体・書法・保存状態・拓本の好悪など、十卷四八四条にわたって解説する。随筆風に書き連ねられたものだけでも、石刻文の対象を大きく広げて総合的に考察している点で画期的で、後の著作への影響も大きかったと想像される。欧陽輔に校勘記（『集古求真統編』十卷、一九三三年、の付録）、柯昌泗（一八九九〜一九五二年）に増補・訂正（『語石 語石異同評』中華書局、一九九四年）、藤原楚水に訳注（『訳注語石』三冊、省心書房、一九七五〜七八年）がある。今回、参照するのは、主に石刻の形や文章内容に関わる卷三〜五である。

卷一 「三代古刻」など、主に各時代の石刻に関する解説

卷二 「総論各省石刻」など、主に各地方ごとの石刻に関する解説

卷三 論碑之名義緣起一則

碑額七則

碑側三則

螭首題字一則

立碑総例一則 附德政碑

字書小学四則

碑穿二則

碑陰五則

穿中刻字一則

論碑帖之分一則

石經二則

封禪一則

卷四

詔勅五則

書札一則

典章一則

界至四則

詩文一則

塔銘二則

經幢八則

卷五

造象十二則

地圖一則

井闌一則

石闕一則

摩厓一則

投龍記一則

食堂題字一則

書目一則

詛盟二則

璽押一則

楹聯一則

石獅子題字一則

石盆題字一則

卷六

「総論撰書」など、主に石刻文の撰者、刻石者、年月に関する解説

符牒四則

格論一則

譜系二則

墓誌十八則

浮図一則

刻經八則

画像五則

橋柱二則

柱礎二則

題名八則

買地劄二則

神位題字一則

医方一則

吉語一則

符籙一則

題榜一則

石人題字一則

石香炉題字一則

石刻雜体一則

卷七

「総論南北朝書人」など、主に書者に関する解説

卷八 書者に関する解説の続き、及び「各体書」などの書体に関する解説

卷九 「陽文」など、主に文章の刻し方に関する解説

卷十 「古碑一刻再刻」「精拓」など、主に石刻文を扱う際の知識や注意など

B、馬衡『中国金石学概要』一九二三年

北京大学において、著者が一九二三年から十年ほど行った講義録で、はじめは油印で印刷されたものらしい。三編八章から成り、金文と石刻文の双方全般にわたって系統立てて概説する点、著録についての概説があるように、より研究の立場から書かれている点などが特徴的だが、残念ながら、その著録についての概説を含めた二・六・七・八章は残っていない。水野清一氏らによってその第四章「歴代石刻」の部分が「支那金石学概要 石刻」と題して和訳されている（『東洋史研究』三卷一、二、四、六号、四卷二号、五卷一、二号、一九三七〜四〇年。のちに藤原楚水『訳注語石』第三冊、省心書房、一九七八年、に「中国古代石刻概論」として転載）。一九六五年になって台湾の商務印書館によって活字化され、また『凡将斎金石叢稿』（中華書局、一九七七年初版。一九九六年に増補重印）にも収められた。特に参照するのは第四章。

緒論

第一章 金石学之定義及其範圍
第二章 金石学与史学之關係
分論

第三章 歴代銅器

第四章 歴代石刻

一 刻石与碑之別

碣 摩厓 碑

二 造像与画像之別

画像 造像

三 經典諸刻与記事諸刻之別

太学石經 釈道石經 医方 格言

書目 文書 墓誌・墓前 譜系

地図・界至 題詠題名

四 一切建築品附刻之文

橋 井 闕 柱 浮図 食堂神位

墓門・黄腸 石人石獸 器物

第五章 金石以外諸品

第六章 前人著録金石之書籍及其考証之得失

結論

第七章 今後研究之方法

第八章 材料処置之方法

C、朱劍心『金石学』商務印書館、一九四〇年

大きく、三編十二章から成る。参照するのは説石の一・二章であるが、この部分はA『語石』からの影響が大きいようである。

第一編 通論

第一章 金石学之名義

第二章 金石学之価値

第三章 金石学之肇始及演進

第四章 金石学之極盛及中衰

第五章 金石学之復興創獲及整理

第二編説金

第一章 総説

第二章 殷周諸器

第三章 秦漢以後諸器

第四章 錢幣璽印兵符鏡鑑

第五章 古器之厄

第三編 説石

第一章 名義制度

刻石 碑・碣 墓誌 塔銘 浮図 経幢

造像 石闕 摩厓 地剝 雜類(橋柱・井

闌・柱礎・神位・食堂・石人・石獅子・石香炉・石盆)

第二章 文字図章

六経 仏経 道経 封禅 詛盟 詔勅

符牒 投龍 典章 譜系 界至 医方

書目 題名 詩文 書札 字書 格言
吉語 題榜 楹聯 符籙 璽押 画像
地図・礼図

第三章 碑版源流

第四章 石刻之厄

D、藤原楚水『書道金石学』三省堂、一九五三年

邦人では恐らく唯一の体系的な金石学の概説書である。大きく、七編二十七章からなる。特に書道からの視点から書かれている点と、竹簡、法帖に対する概説がある点が特徴的であるが、金石学全体に渉る部分も非常に良く整理されている。特に石に関わる部分はその第三編である。

第一編 序説

第一章 書道金石学の意義

第二章 金石学の成立

第三章 金石学の中衰時代

第二編 金文

第一章 金石学の復興

第二章 璽印及び封泥

第三章 兵符鏡鑑及び権量

第四章 古泉

第三編 石文

第一章 石鼓

最古の刻石文	石鼓の顯晦	石鼓の年代
第二章 始皇と刻石	石鼓の書体	石鼓の存字と学習
第三章 始皇の文字統一	始皇の文字統一	始皇の刻石
第三章 碑碣文字	碑と碣	古隸書の刻石
	隸書の碑碣	現存
	せる隸書の刻石	隸書と八分
	漢碑と我國の	
	書道界	楷書の刻石
		行草書と刻石
第四章 石闕	廟前の石闕	墓前の石闕
第五章 磨崖	褒斜道の磨崖	雲峰山の磨崖
		徂徠山の磨崖
第六章 墓誌と塔銘	墓誌銘	塔銘
		著名な墓誌及び塔銘
第七章 画像	漢代の絵画	漢画の石刻
第八章 造像	莫高窟	雲崗石窟
		龍門石窟
第九章 石經	儒教の石經	仏家の刻經
		道家の石經
第十章 浮図		
第十一章 経幢		
第十二章 石刻鱗爪		

橋柱	井闌	石柱	題名	石人題字
石獅子題字	買地劄	字書小学	封禪	
詔勅	詩文	医方	書目	詛盟
題榜	楹聯			璽押
第四編 古陶及び瓦磚				
第一章 古陶と瓦當				
第二章 古磚及び陶甕				
第五編 甲骨及び流沙墜簡				
第一章 甲骨文字				
第二章 流沙墜簡				
第六編 法帖				
第一章 法帖とは何ぞ				
第二章 宋元明清の法帖				
第七編 金石学と書道				
第一章 金石学の書道界への影響				
第二章 来るべき書道				

E、趙超『中国古代石刻概論』文物出版社、一九九七年

近年刊行された、石刻を専門とする概説書。単なる石刻文の分類だけでなく、遺物の概況、研究史、釈読方法、鑑別など実際に石刻文を扱う際の基本的な方法が、非常に幅広く、かつ体系的な視点で書かれている。特に関連するのは、その第一章である。

前言

引言

第一章 中国古代石刻的主要类型及其演变

刻石（摩崖与碣）

碑

墓碑（包括神道碑）

功德碑

纪事碑

经典

及其他书籍刻碑

造像碑

题名碑

宗教碑

地图・天文图・礼图碑

书画碑

墓志

塔铭及与塔有关的石刻

经幢与墳幢

造像题记

画像石

经版

买地券及鎮墓券

建築附属刻銘及其他雜刻

第二章 中国古代石刻的存留状况

第三章 歷代石刻研究概況

第四章 石刻銘文的釈読与常見体例

第五章 石刻及其拓本的辨偽鑑定与編目整理

このように列べてみると、すでにA『語石』において、十分に大系されているわけではないけれども、対象とすべ

き石刻文の大部分が言及されていること、後の著作は『語石』を承けて、石刻文の分類を出来るだけ整理しようと努力し、次第に体系化の度合いを増してきていることなどが、この簡単な概観からも明らかになるであろう。

しかし、改めて、石刻文が、「ものの説明」だった甲骨文や金文と記載内容が全く自由であった竹帛や紙と中間であることを考えるならば、その分類には、石刻自体の形や用途からの分類と刻された文章の内容からの分類の大きく二つがあるはずである。そして、さらに、前者の石刻自体の形や用途の分類の中には、文章を記録したり顯示したりするために作られた石刻なのか、本来別の目的に作られた石刻の説明として文章が附刻されているのか、言い換えれば、石刻自体と全く関係のない文章を刻すことが可能なのか、その石刻の用途に従属した文章しか刻すことが出来ないのか、という分類があるはずである。

このような分類で先の分類を見直すならば、例えば、「碣」「碑」「浮図」「闕」などはものの形の分類であり、これらが石で作られた時に特に「石」と熟する。この他に「石人」「石盆」なども同様である。ただこれらの石刻の中で、「碣」「碑」は専ら文章を刻するための石刻だが、「浮図」「闕」「石人」「石盆」などは、文章を書くためだけにつくられる石刻ではない。このため、文章を刻さない「碣」「碑」は異例に属するが、文章の刻されない「浮図」

「闕」「石人」「石盆」は多数存在する。一方、「経書」「詔勅」「詩文」「題名」「吉語」などは刻された文章の分類である。特に「石経」というのは、石に刻された経典という意味であるが、石刻自体の形に対する制限はなく、また「造像記」は仏像などに刻された題記の一種である。さらに、石刻の形の分類と文章の分類の双方に共通するのが「墓誌」である。ただ、文章としての墓誌の方が先に発達したから、墓誌の形の石に刻されていない墓誌も数多くあり、特に碑形の石に刻された場合には「墓碑」という。もとより、石刻文は非常に多種多様であるから十全なものとは思えないが、次節では、石刻自体の分類を基礎としながら、これまでの分類を再整理してみたい。

三、石刻文の分類私案

前節の概観に基づいて、本節では分類の私案を提示し、あわせてその石刻文の特徴の簡単な説明、及び具体例を列挙してゆきたい。ただ、古くから知られており、かつ比較的簡単に参照できる例を選んだので、必ずしもそれぞれのものの最古の例とは限らない。例に挙げた石刻の図版が載せられている書籍は下記の通りである。具体例の後に、それぞれの書籍の番号・ページ数とを示し、あわせて（写）と（拓）によつて載せられている図版が写真か拓本かを区

別する。

- ① 神田喜一郎他編『書道全集』第七卷、平凡社、一九五五年
- ② 趙万里『漢魏南北朝墓誌集釈』第五卷、科学出版社、一九五六年
- ③ 神田喜一郎他編『書道全集』第十卷、平凡社、一九五六年
- ④ 神田喜一郎他編『書道全集』第八卷、平凡社、一九五七年
- ⑤ 神田喜一郎他編『書道全集』第五卷、平凡社、一九五七年
- ⑥ 神田喜一郎他編『書道全集』第二卷、平凡社、一九五八年
- ⑦ 神田喜一郎他編『書道全集』第三卷、平凡社、一九五九年
- ⑧ 藤原楚水『訳注語石』上、省心書房、一九七五年
- ⑨ 日比野丈夫『図説中国の歴史』第四卷「華麗なる隋唐帝国」講談社、一九七七年
- ⑩ 角井博『中国法書ガイド』第二五冊「墓誌銘集」上、二玄社、一九八九年
- ⑪ 西林昭一『書の文化史』上、二玄社、一九九一年
- ⑫ 徐暢編『中国書法全集』第四卷「春秋戦国刻石簡牘帛書」荣宝齋、一九九六年

⑬ 西林昭一『書の文化史』中、二玄社、一九九七年

⑭ 石川九楊主編『書の宇宙』第二巻、二玄社、一九九七年

⑮ 石川九楊主編『書の宇宙』第四巻、二玄社、一九九七年

⑯ 蠣波護、武田幸男共著『世界の歴史』第六巻「隋唐帝国と古代朝鮮」中央公論社、一九九七年

以下の分類私案と、その中に例として分類された具体的な石刻文の名称とを対照するならば、石刻文の呼称の基準が一定していないことが改めて確認できるはずである。

(A) 文章の記録や顕示を主眼とする石造物。

4、墓誌を除いては刻される文章の内容は様々であるので、例として挙げた石刻文には、それぞれの文章の内容を簡単に記す。

1、摩崖

天然の巖壁や岩などに刻されたもの。漢代から継続して作られ、1字の一辺が三〇センチを越すような巨大なものも多い。

『開通褒斜道刻石』六三年、陝西省褒城縣、⑪一一四頁

(写)、⑮八〇・九二頁(写)。道路の開通を記念する文

『大吉買山地記』七六年、浙江省会稽縣、⑪一四五頁

(拓)。墓地購入を記す文

『鄭義下碑』五一一年、山東省益都縣、⑬八六頁(写)。

鄭義の事績を記す文。

『瘞鶴銘』五一四年か？、江蘇省丹徒縣、⑬八三頁

(写)。仙人の乗る鶴の死を悼む文。

『泰山金剛經』六世紀後半、山東省泰安縣、⑬一四二頁(写)。末法の到来を憂いて録された仏典。

『大唐中興頌』七一年、湖南省祁陽縣、⑨一五〇頁(拓)。唐王朝の再興を頌える。

2、碑碣

様々な文を刻して記録し特立して顕示するための、石刻の2つの形態。碣の方が古い。

碣：『説文解字』「石部」には「特立の石なり」とあるように、後述する碑の形をなさない立石の総称である。

『石鼓文』戦国中期か？、陝西省鳳翔縣南。最古の石刻の一つで、狩猟の故事を記す。⑭二四頁(写)。

『泰山刻石』前二一九年、山東省泰安縣。秦の始皇帝の功德を誦う。⑭三九頁(写)。

『漢侍廷里父老僊買田約束石券』七二年、河南省偃師縣。地域互助団体「父老僊」の成員の權益を記す。⑪一四六頁(拓)。

『封禪国山碑』二七七年、江蘇省宜興縣。封禪の礼を行ったことを記す。⑪二四八頁(写)。

『好太王碑』四一八年、吉林省集安縣。好太王の事績と

国事を記す。⑬三一〇頁(写)。

碑：その起源には、(ア)犠牲を繋ぐ宗廟内の柱、(イ)

日時計(ウ)滑車をつけ棺を墓内に降ろす柱、など様々な説があるが、趙超氏は前掲の『中国古代石刻概論』において、一九八六年に発掘された秦公大墓(陝西省鳳翔県)の墓道に木製の碑があったことを指摘して、(ウ)の説を主張する。この柱が、質が緻密で黒みを帯びた石灰石や大理石で造られ、文字が刻されて石碑となったのであろう。漢代に整ったその基本形は、下に長方形の台座(方趺)があり、その上に平板で丈高い碑身が立ち本文が刻される。表を碑陽、裏を碑陰、両脇を碑側という。本文の上に方形や圭形の題額をつけ、頂の形には三角形に尖った圭首と丸い半円形の円首がある。この型式は後に装飾的になり、方趺の他に亀を象った亀趺、圭首は無くなって円首の中に龍などを刻した螭首が現れた。南北朝時代にはやや衰えたが隋唐時代には再び盛行し、本文や額が能書家により、碑側や方趺に唐草文様などを刻したり、別に頂に額石を載せたりする豪華な碑も現れたが、その後は基本的な様式に新たなものは現れなかった。

『景君碑』一四三年、山東省任城県。北海国の丞相景君の墓碑。圭首。⑪一五五頁(拓)。

『孔謙碣』一五四年、山東省曲阜県。孔謙の徳を頌える。円首。⑥三三頁(写)。

『王舍人碑』一八三年、山東省平度県。断列のため文意

は不明。亀趺。⑪二〇一頁(写)。

『皇帝三臨辟雍碑』二七八年、河南省洛陽市。行幸による教学の隆盛を頌える。螭首。⑥三五頁(拓)。

『成晃墓誌』二九一年、河南省洛陽市。墓内に立てられたと思われる成晃の墓碑。⑦図九五(拓)

『水牛山文殊般若經碑』北齊、山東省寧陽県。仏經。⑬一四六頁(拓)

『集王聖教序』六二七年、陝西省西安市。王羲之の書を集刻する。④四〇頁(拓)

『龍興觀道德經碑』七〇八年、河北省易県。道教の經典。⑧七六〇頁(拓)。

『石台孝經』七四五年、陝西省西安市。玄宗注の『孝經』。額石をのせる。⑨一〇九頁、(写)

『開成石經』八三七年、陝西省西安市。經書。⑨一四五頁、(写)(拓)。

3、墓誌

墓主の経歴を刻して墓内に埋めるもので、本文をほぼ方形の石板に刻して上向きに安置し蓋石をかぶせる型式のものをいい、六世紀以降に発生、定着した。後に、蓋石には題字の他に華麗な文様や瑞獸を刻したものも現れ、また石全体が亀を象ったものもあるが、隋唐以後も基本的な型式に大きな変化は起こらなかった。ただし、文章としての墓誌の祖形は秦代まで遡ることができ、盛んに造られるよう

になった三国時代以降、はじめは碑の型式を小さく模して墓内に建てられており、六世紀半ば以降、韻文の銘辞を伴うようになっていた。

『寇臻墓誌』五〇六年、河南省洛陽市。②図二〇六

(拓)。

『元顓僞墓誌』五一三年、河南省洛陽市。⑩四頁(写)。

『独孤思貞墓誌』六九八年、陝西省西安市。⑯一九九頁

(石)

4、板券

裝飾の少ない石板に刻されているもの。記録に重点が置かれ複数一組のものもある。

『朱曼妻薛買地券』三三八年、浙江省平陽県。土地神との墓地売買契約を記す。⑪二八三頁(拓)

『房山石經』隋・明、河北省房山県。仏典。⑯一七四頁

(写)

『三希堂帖』一七五〇年、北京市。書家の書を集刻した法帖。

(B) 別の目的に彫造された石に文字を附刻するもの。

大多数は彫造の依頼者・年月・由来・内容などを記す「題記」である。画像石と闕・柱が陵墓の彫造物、仏像、塔、幢は仏教の彫造物である。

1、画像石

漢代に墳墓内の壁面に刻された人物の伝記や馬車の行列などの絵で、題記が刻されることがある。

武氏祠の画像石 一四七年、山東省嘉祥県。⑪一五七頁

(拓)

『許阿瞿画像石題記』一七〇年、河南省南陽市。墓主の事績を記した珍しい例。⑪一六七頁(拓)

2、闕・柱

主に漢・南北朝に、宮殿や陵墓の前に建てられたもので、闕は牆壁の中央が闕けて門のようになっていたもの。題記の他に題額がある場合もある。

『高頤闕』二〇九年、四川省雅安県。⑬一四九頁(写)

『蕭景神道石柱題字』五二三年以後、江蘇省南京市。⑬

八一頁(写)

3、仏像

南北朝以降、盛んに造られた仏像の台座や背後、石窟に場合にはその周辺に、「造像記」と呼ばれる題記が刻された。

『妙相寺造像題字』四八八年、浙江省会稽県。⑬五七頁

(拓)

『始平公造像記』四九八年、河南省龍門。⑬六九頁(写)

『伊闕仏龕碑』六四一年、河南省龍門。①三二頁(写)

4、塔

浮図ともいう。寺院の巨大な塔の他に、南北朝・唐に功德を求める士庶による小さな塔もあり、題記の他に仏經が

刻されるものもある。

『曹天度造塔銘』四六六年、山西省朔県。⑬四五頁(写)

『田義起造七級石浮図頌』七十二年、河北省房山県。③

二三頁(写)

5、幢

経幢ともいう。武后期く元代に仏の功德を求めて造られた八角(その他、四角、六角、十角のものもある)の石柱。柱の各面に仏経や由来などを刻し、蓮華台に立てて蓋をかけ仏龕や宝珠などを組み合わせたもの。主に『仏頂尊勝陀羅尼経』を刻すが『般若心経』などのものもあり、また一部には建立の由来を刻すものや道教の幢もある。

『仏頂尊勝陀羅尼経幢』六八九年、陝西省富平県

『龍興観道德経幢』七三八年、河北省易県。道教の幢。

⑧二九〇・二九一頁(拓)

『八関斎会報徳記』七七二年、もと河南省商丘市。田神功の平癒を祈願した文。石は伝存しない。③図五二・

五三(拓)

『封崇寺光啓二年尊勝陀羅尼経幢』八八六年、河北省行

唐県。③二五頁(写)

6、橋梁、井戸、棺柩、楽器など。

『秦公大墓石磬銘』前五七四年、陝西省鳳翔県。『石鼓文』を更に遡る、最古の石刻文と思われる石刻文。

⑫一六く四〇頁(拓)

『天監石井欄題字』五一六年、もと江蘇省句容県。⑤一

四三頁(写)

7、追刻

別の石刻に、後の人が姓名・年月・印象などを追刻するもの。名勝地の岩壁に刻す磨崖などもある。

四、おわりに

本稿では、これまでの研究の多くが、文章内容からの分類と石刻の形からの分類とを混在させていたことを起点とし、特に石刻の形からの分類の上に、文章と石刻のいわば「主従関係」を念頭において分類を試みた。

もとより、多種多様な石刻文をこのように単純化できるかどうかには、いまだ未解決の問題も多い。例えば、(B)の「別の目的に彫造された石に文字を附刻するもの」として分類した5「幢」は、かなり制限があるとはいえ、かなり多くの種類の文章が刻されていることを考えれば、幢を作ることはなく文章を刻むことが主目的だったのではないかということ、(B)の2「仏像」に分類した『伊闕仏龕碑』は、確かに龍門石窟を修理・開鑿して仏像を刻んだことを記す文章だが、そもそも岩壁に碑形を模して刻され、しかも非常に大きいことを考えれば、「造像記」ではなく「磨崖」とする方が適當ではないのか、など多くの問題が

存在する。

より根本的な問題として、例えば、墓碑・墓誌・墓券などのように、石刻の形が異なっても目的や用途のほぼ同じ石刻も存在するから、石刻の形から単純に分類すること自体にも多くの問題が存するであろう。今後も様々な角度から考えてゆきたい。